OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂教授・吉田鋭雄と蜀人・査体仁『学庸俗話』
Author(s)	白井, 順
Citation	中国研究集刊. 2017, 63, p. 74-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70146
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　果号（総六十三号）平成二十九年六月　七四―八七頁

〔特集〕

懐徳堂教授・吉田鋭雄と蜀人・査体仁『学庸俗話』

白井　順

一、吉田鋭雄（一八七九～一九四九）について

重建懐徳堂最後の教授（所謂校長に相当する地位）・吉田鋭雄（はやお）は（字は敏夫、号は北山）、大正一二年（一九二三）年一一月から大正一四年（一九二五）六月まで北京に留学した。彼は明治一二年に大阪市に生まれ、初め大阪朝日新聞社に勤務した。その際に西村天囚と面識を得て、大正五年（一九一六）、重建懐徳堂書記に就任した後、懐徳堂助教授をへて、教授となった。富永仲基の研究をはじめ、『池田人物誌』を編集するなど北摂の学術に関する多くの業績を残した。『淮南鴻烈集解』や『荘子補正』の著者として知られる清華大学国文の劉文典（字は叔雅、一八八九～一九五八年）とも交流があり、大正一二年には『論語義疏』を出版した。大正一五年（一九二六）に懐徳堂で、「支那学概論」を講義している。また、文部省在外研究員として大正一二年（一九二三）年一一月から大正一四年（一九二五）六月まで北京で漢籍の蒐集に努めた。吉田鋭雄の留学生活(注1)については、釜田啓市「吉田北山の北京留学」(注2)に詳しい。彼は北京で常先生から中国語を学んだが、テキストは『四書』であったという。北京では琉璃廠の述文堂で『碑伝集』『正誼堂叢書』『積学斎叢書』『槐廬叢書』などを購入し、北京到着から二週間も経たないうちに、約千冊の本を購入したという。彼の逝去後昭和三一年（一九五六）に、その旧蔵漢籍約四千四百冊が大阪大学に寄贈され、現在

懐徳堂文庫内に北山文庫[注3]として保管されている。『懐徳堂文庫図書目録』を開くと、晩清時期に出版された四書に関して、吉田は集中して購入している[注4]。目録一九頁下段に列挙する『四書撫余説』より『図画白話解』までの一五種[注5]の晩清に出版された四書注解書はすべて北山文庫所蔵である。他にも、晩清中国で出版された蜀の大儒・劉沅『大学古本質言』や『四書古注十一種群義彙解』なども北山文庫に所蔵されている。

昭和二〇（一九四五）年三月の空襲による焼失を免れた重建懐徳堂の三万六千点の蔵書[注6]は、昭和二四年（一九四九）に大阪大学に寄贈された。今回取り上げる査体仁『学庸俗話』には懐徳堂の蔵書印とともに、昭和二六年九月一〇日に大阪大学図書館に入庫した印（No21778）が押されているのみで、読過の痕跡も他の蔵書印もなく、吉田が査体仁『学庸俗話』を購入したことを裏付ける証拠はない。しかし吉田が懐徳堂のために購入した可能性も考えられるので、『学庸俗話』を紹介しつつ、その接点を探って行きたい。

『学庸俗話』はその名が示す通り、従来の『大学』と『中庸』の朱子学的解釈を咀嚼した本である。現在からみれば査体仁は有名人ではないし、近代化を推し進めた近代蜀学の学問からみれば、『学庸俗話』は古い形式の学問である。『学庸俗話』の著者・査体仁は蜀の人であるが、四川大学図書館や四川省図書館にもこの本はすでに存在しない。そして中国国内にもほとんど所在を確認できないのみならず、『四庫未収書輯刊』・『稀見清代四部輯刊』・『晩清四部叢刊』のいずれにも収録されていない。現在巴蜀地域の文献を蒐集し『巴蜀全書』として出版する計画を進めている四川大学古籍整理研究所にとって、『学庸俗話』は重要な日本所蔵巴蜀文献の一つだと言えよう。

二、査体仁について

崇州は『華陽国志』の著者常璩の郷里であり、唐では蜀州、宋元では崇慶と称されていた場所であるが、査体仁はその崇州の西側に隣接する大邑の出身である。大邑県は清代には邛州に属し、道教の聖地・鶴鳴山をはじめ、仏教の聖地・霧中山や西嶺雪山などの風光明媚な土地として知られている。査体仁、字は聖菴、号は聴谷（別号は聴天翁）、その他に賸安という呼び名がある。彼は大邑の増生（いわゆる生員、三年に一度の郷試に参加できる）である。彼の父は査時艱（査時銀）といい、湖北・麻城から大邑に移ってきた。道光一八年（一八三

八）の大飢饉の時、呉某が幼女を売っており、査時艱は可哀そうに思って買い、その幼女を育てて嫁がせ道を誤らせないようにさせた。彼の行いの多くはこのようなもので、人は査時艱の厚徳を称賛したが、彼は「多く徳を留めるのは子孫と居れば十分だ。どうして厚く徳を積む必要があろうか〔注7〕」と言った。

査体仁は光緒三一年に『大邑県郷土志』を編纂している。『大邑県郷土志』は光緒三〇年に大邑県知県の任にあった紹曾の編修となっているが、紹曾は満州人で、実質的には査体仁が編纂した。『大邑県新修郷土志』七頁に記される編纂者には「奉修　同知銜四川邛州直隷州大邑県知県紹曾〔満州挙人〕、校訂　四川邛州直隷州大邑県儒学教諭冉人瑞〔東郷県廩貢〕、纂輯　軍功保挙六品銜遇缺即選巡検査体仁〔大邑県増生〕」とある紹曾の序文には「然則郷土志之修、其功豈浅鮮哉。是役也、邑教諭冉君醉唐、邑増生査君賸安、均与有力焉。書成聊綴数語、跋諸簡端以見意。至於修志之本末与其中斟酌損益、則冉君査君已詳言之矣。曽固不復及也〔注8〕」とある。そして査体仁と共に編纂に携わった冉人瑞（醉唐）も「大邑県新修郷土志序」で次のように言う。

閲明年乙巳、奉　憲檄飭修郷土志、并令延請通儒、彙纂成編。査例序有云、事貴求其詳核、文必期于簡雅。自非博学多識、未可濫竽。北門鎖鑰、非準不可。査君賸安其人也。賸安力学好古、老而彌篤、生平著述〔著大中俗話十三巻、発蒙語正一巻〕見賞于三原賀君復斎、涇陽劉君蘊山、刊印回陝。愚曽上之督学部院呉、賛其語無駁雑、有得程朱之学。其為人不楽仕進、誠敬淵黙、吶々然外無臧否、有造廬者与之論古今談性道、則口若懸河滔滔不絶〔注9〕。

これは、光緒三一年（一九〇五）時点での査賸安即ち査体仁に対する評価を伝える重要な記述であるとともに、彼の『学庸俗話』（上文中では「大中俗話」と表記）が県内の人々に読まれていたことがわかる。『大邑県郷土志』には査体仁の著作として『学庸俗話』以外に発蒙語正一巻、淡話五巻、河洛略二巻、名孫説一巻が挙げられている〔注10〕。息子の査光大が記した『学庸俗話』の識語には「禹貢考、学古文存、古・近体詩、暨輯『仰止同源録』若干巻」と著作が挙げられているが、光緒三一年時点で既に存しなかったようである。査体仁自身が記した「四川邛州大邑県郷土志書後〔注11〕」には次のように言う。

体仁忝為学人、消磨七十有三年矣。徒多疚心、竟無一得、兼以衰病遞増、久謝生徒、閉門静攝、稍暢則辨晰義理、以斂心適性、耄矣、尚何楽。妄弄柔翰、

玩物喪志、為達士訶乎。乙己秋、紹遠峯邑侯奉檄修大邑郷土志、耳食虚声、猥以体仁前曽与修県志礼延、同邑博冉汝賢広文贊勳其事。

光緒三一年（一九〇五）に査体仁は七三歳であるから、道光一二年（一八三二）頃に生まれ、『学庸俗話』自序を記した光緒一〇年（一八八四）には五二歳だったことになる。『学庸俗話』自序に「以舌代耕世年」とあり、二十歳すぎから三十年間一貫して教職にあると述べている。また『学庸俗話』自序には「髫齢失怙、頻欲廃学、頼母氏慈厳畢至、乃未改業。及冠倖列膠庠、方幸得覩芹藻鸞旂、沐浴清化」とあり、何の才覚もない不器用な人間なので、文筆で生計を立てることにして、自分に「知識人だ」と言い聞かせながら教壇に立っていた[注12]。彼はどのような人物であったのか。民国十九年『大邑県志十四巻』には次のようにある[注13]

査体仁、字聖庵、号聴谷。為人孝友、尤好宋五子書。入庠後、以樸学倡、朔望必衣冠、講朱子小学。城居近市、授徒湖広館、迂道曲巷者四十年。少従汪学博屏山遊、詩古文皆雅潔。晩年別号聴天翁、自為伝存於家。子光大庠生、亦承其家学、以善書名。

文中に「尤も宋五子書を好む」・「朱子小学を講ず」とあるように、査体仁の学問は朱子学である。「迂道曲巷」とあるから、県学といった公の学校ではないところで教鞭を執っていた。文中の汪学博（号は屏山、学博は教師の称）とは汪瀛（一八〇二～一八九二）のことで、順治年間の大邑県令・汪徐飛（江南徽州府人）の後裔である。汪瀛は咸豊六年（一八五六）に訓導となり、同治年間には兄弟の汪洋・汪浩ともに大邑で活躍した人物で、民国十二年に郷賢祠に列せられ、現在大邑県青霞鎮に墓がある。汪瀛は文筆に長け、内閣典籍銜職員の職を加えられ、光緒一八年に九一歳で亡くなった。著作には『大邑県志』の補正を行った『邑志補遺』十二巻および『正誤』一巻[注14]、『殲賊日記』一巻・『青屏山房詩文全集』八巻・『明倫考鏡録』若干巻がある。汪瀛の文集『青屏山文集』（四川省図書館所蔵）には「門人査聖庵詩稿序」という文章が収録され、査体仁は彼の門人であり、且つ詩集（『余香詩草』）もあったと確認できる。査体仁は汪瀛の伝を書いており[注15]、彼によれば、汪瀛は南谿県訓導のとき、朱熹の『小学』の例に倣い、『明倫考鏡録』若干巻を記したという[注16]。査体仁も同治六年の『大邑県志』の重修編纂事業にも携わり[注17]、汪瀛の修志事業と密接な関係にあった。汪瀛は門人である査体仁に宛てた「与査聖庵論修邑志書」[注18]で『重修大邑県志』における問題点を述べている。他にも同治四年（一八六五）

に大邑城の東側にある東嶽廟について「同治四年文生黄紀雲、朱肇濂、査体仁、従九張汝雯四人、復為振興、立有宕册、稟官立案、今沿為規」と『重修大邑県志』にある。この時に汪瀛は「東嶽廟文昌社会序」(注19)を記しており、査体仁は汪瀛ともに県志や郷土志の編纂に携わるだけでなく、郷土の歴史・偉人・事績の記録や顕彰に努め、地域の儒学文化の振興にも尽力していたことがわかる。

三、『学庸俗話』出版の経緯

重建懐徳堂所蔵『学庸俗話』は、封面には「光緒壬辰仲春　学庸俗話　張瀾題簽」とある。『大学俗話』・『中庸俗話』全四冊で、成都の古臥龍橋学道街黄文舫斎から、光緒一八年（一八九二）に出版された。『成都市志・図書出版志』(注20)によれば、成都の黄文舫斎は光緒年間に営業した書舗であるが、具体的なことは不明である。『学庸俗話』は、巻頭に梅震煦「新刻学庸俗話序」、賀瑞麟「賀復斎先生教正書」、査体仁「学庸俗話自序」と並び、巻八の巻末に査体仁「跋」と息子・査光大の識語がある。著者は査体仁であるが、二度の校正を担当したのが張瀾（雲波）と劉瑨（蘊山）なので、『学庸俗話』巻頭には「江原査体仁聴谷述　三原張瀾校字、涇陽劉敦厚掌梓」と記してある。

光緒辛巳七年（一八八一）冬に、姻家の陳大江が学校に入学し、翌年に科挙の勉強を始めたことを機に、査体仁はかねがね書きたいと思っていた『大学俗話』を書き始め、先に『大学俗話』を書き終えたが、『中庸』については保留しておいた。学生たちが『中庸』も書いてほしいと望んだので、光緒八年春に『中庸俗話』を二ケ月ほどで初稿を書き上げた(注21)。光緒一〇年（一八八四）春三月に『学庸俗話』自序を記した。

自序から半年後の光緒一〇年（一八八四）秋、査体仁は『学庸俗話』跋文を記し、脱稿した。跋文には「今春始、抽間握管急為草、就其応増刪改正処、自知多矣」とあり、続けて夏の間に『大学俗話』、秋に入ってから『中庸俗話』の構成を練って(注22)修正を加えた。修正原稿は初稿の二三割ほど削除したが、初学者向けのテキストであるため繰返しが多く、もっと高名な人に訂正してもらいたいと思っていた(注23)。査体仁が跋文書いた翌年（一八八五）冬に大邑城内は賊に襲われ、家の稿本が焼かれてしまった。学校に保管してあった副本を赴任したばかりの梅震煦に見せたことから、『学庸俗話』出版へ話が動き出した。査体仁の息子・査光大の手による識語

には次のようにある。

梅篠山先生来権邑事、急其所先、以因時因地因人為治、民頼以安。及瓜、家厳、甫呈請正、先生一見大悦、謂為一生心血、有関名教、急宜梓行、為序嘉勉。将還省、造館諄諄促刻、函助刊金、終限於力有未逮也、抑以終難自慊也。箑爐屢易、恐終就湮矣。先生猶時垂問、令為謄正、楽付梨棗、以公同好。詎意牧崇慶州時将梓、又以調動止。張君瀾還三原、家厳乞再請正於賀復斎先生、蒙楽教正、年余寄還。辛卯歳、苦疾疚。家厳抱恙、自春徂夏、静調弗瘳、日取是稿、呻吟筆削。光大踧而請曰、病久神傷、且少安。家厳斥之曰、幸承賀先生教正、以病篤、不急改恐莫及、終貽誤也。惟恐初学難明、早知不免費辞、反復躊躇、究難自刪耳。然只求不悖程朱已矣。欲了夙願、何慮我也。尚謹蔵以待時。壬辰春、関中蘊山劉君瑨、雲波張君瀾欣然捐刻於蜀、且楽広為伝佈、以利訓蒙、欲人趨正学、厥功偉矣。謹紀顛末、請列賀先生書於首、用志教益至。稿経再繕、初則有劉君全信、劉君継志、及蘊山雲波。後惟雲波監刻、磨対則有侯君慶廷、侯君秀麟、例得備書。男光大敬識。

光緒一一年（一八八五）三月、梅震煦が大邑県知州として大邑に赴任した。梅震煦、字は篠山、陝西・長安の人である。査体仁『大邑県郷土志』の梅震煦の伝によれば[注24]、光緒九年秋と光緒一〇年冬の二度に渡って大邑城は土匪の焚掠に遭い、梅震煦は治安回復に努め賊を捕まえ治政を敷いた人である。梅震煦は赴任早々に治世を敷いたので、光緒一三年（一八八七）に査体仁は彼の是正を得たいと思って『学庸俗話』の副本を見せた。梅震煦が出版に向けて働きかけをして崇慶州で出版しようとした矢先、転任してしまったので、張瀾に賀瑞麟の是正を乞うことになったようだ。査体仁と張瀾の関係は不明であるが、光緒一七年（一八九一）に査体仁は病の体をおして賀瑞麟の是正に沿って再度修正を加えた。最初は劉全信・劉継志が校正を担当したが、光緒一八年（一八九二）の春に劉瑨（蘊山）と張瀾（雲波）が校正をして、磨対は侯慶廷と侯秀麟の二人が行ない、初稿から九年かかって出版に至った。

『学庸俗話』を出版するにあたって、査体仁の本来の希望に適うように、関中で朱子学の権威として名高い賀瑞麟の批正をもらうことができたのは、関中出身の劉瑨（蘊山）、張瀾（雲波）の二人に拠るところが大きい。『賀瑞麟集』[注25]の清麓精舎講学参加者や書簡のやり取りには張瀾や劉瑨の名がみえないので、彼らが賀瑞麟とどのような関係にあったかはわからない。関中出身（三

原・涇陽・長安）の彼ら四人が出版を推進したからこそ、巻頭に「梅篠山先生　賀復斎先生　鑑定」と記したのだろう。賀瑞麟（一八二四～一八九三）は清末の関中を代表する朱子学者で、清麓精舎で『養蒙書』・『小学』・『近思録』の講読を行ない朱子学の実践と再興に尽力した人物である。

四、『学庸俗話』について

査体仁自身が「跋文」で述べるように、本書の特徴はその解説と構成である。

体仁欲衍学庸、俗話為塾中訓蒙、以紙筆之労代口舌之苦意也。蓄意雖久、今春始抽閒握管、急為草就。其応増刪改正處自知多矣。敢遽信可存乎。但見聞精力、均苦不逮、更苦少折衷、恐久散失、枉費此心。夏間、乃率意分大学為五巻、入秋、又擬分中庸、据首末総冒総結、中分三大支、応為五巻、以篇幅多寡不倫、妄将第二支分巻為二、第三支首六章、次三章又次三章分巻為三、惟首末及第一支各為巻一、共成八巻。亦稍寓鄙臆也。惟意主引蒙、是以反覆滋多、即刪初稿十之二三。字亦不少、非喜饒舌、煞具苦心也。用述鄙懐、尚俟高明正是、使繁簡得宜、解説不謬。是不惟体仁有厚幸已也。光緒十年甲申初秋之望日、江原査体仁聴谷氏跋（一八八四年）

全体の構成は次のようになっている。『大学俗話』巻一経、巻二～巻五伝、『中庸俗話』巻一首章、巻二（第一支：第二章～第十一章）、巻三（第二支：第十二章～第十九章）、巻四（第二支：二十章）、巻五（第三支：第二十一～二十六章）、巻六（第三支：第二十七～二十九章）、巻七（第三支：第三十～三十二章）、巻八末章。一冊目序に賀瑞麟の教正書が附してある。賀瑞麟はこの『学庸俗話』を陸隴其の『松陽講義』と併称するほど評価したが、その陸隴其（一六三〇～一六九二）は浙江省平湖県の人で、四川道監察御史の官につき、善政を敷いたと言われる。その学問はもっぱら程朱の学を尊び、居敬窮理を旨とし、清代の儒学者のなかではもっとも早く孔子廟に従祀された。本書の特徴を知るうえで、賀瑞麟が『学庸俗話』を陸隴其の『松陽講義』と併称したことは、非常に重要な意味を持っている。いま賀瑞麟の「賀復斎先生教正書」を見ると、次のように問題点を指摘している。

統観大著大中俗話二冊、具見誘進初学苦心、明白暁暢、使読者心豁、又能発揮文理所以接続、脈絡所以貫通之處。魯斎直解以及江陵直解、反無如此、詳明

其理。皆本朱子大注或問諸書、不参旁説、可謂純正、直可与国朝陸稼書先生松陽講義並伝矣。但陸書毎章必有学者読這章書一段、説到学者身上最為親切、此又不可不知也。此書公之斯世亦斯文之大幸。間有一二未安処條紙粘正、亦稍有辞費処、不解更能裁節否。以君言査先生下問之誠、不敢不尽、愚也、幸達于査而恕其僭妄。張君足下即覧、賀瑞麟手啓。

『大中俗話』（すなわち『学庸俗話』）は子供向きに作られたテキストとはいえ、賀瑞麟が読んでも、その工夫は平易な表現のみならず深い理解を兼ね備えたものであった。所謂「直解」と言っても、元の許衡『直解』、明の張居正『直解』であっても、このように初学者にも平易に了解せしめるようなものではなく、朱子学的に「純粋」だと朱子学者の賀瑞麟は感じた。「賀復斎先生教正書」に附した張瀾（雲波）の「雲波手書」には、賀瑞麟に面会した際に言われた内容を次のように伝える。

斉五劉兄入覧：査賸安学庸俗話一書、客冬抵家日促、于今正方持謁賀復斎于清麓精舎。先生一見極深嘉賞、言為有用之書、并称題籤字体樸静、知為純儒、非世俗渉獵之流。少頃又言、天下何地更無人耶。楽為校正、俟竣自当帯来、不致遺失。乞将此意与査先生道知、并懇代致拳拳。張瀾頓首。

実際には査体仁ではなく、劉璿（斉五）が張瀾のもとを訪れて賀瑞麟の是正をお願いしたようだ。賀瑞麟は『学庸俗話』を「有用之書」と評価しただけでなく、査体仁の筆跡がその純儒たることを体現しており、また「こんな地にもこんな人がいたとは」などと述べている。察するにこの大儒は、査体仁のなかに関中朱子学と共通するものを感じていたようだ。しかしながら賀瑞麟が評した陸隴其『松陽講義』と『学庸俗話』とはその編集スタンスが異なる。その最大の特徴であり、査体仁が最も趣向を凝らした点であるが、『学庸俗話』は読者を子供に設定しており、説明には殆ど他の朱子学関係書を引用しない。陸隴其『松陽講義』では、蔡清『四書蒙引』・陳琛『四書浅説』・林希元『四書存疑』・呂留良『四書講義』などの書を引用している。査体仁は序文で次のように述べている。

昔以以身教人者為人師、授経者為経師、近以訓蒙為蒙師。体仁蒙師也。蒙与経雖異其名、師与師実同其責。既教人学、是烏可以不講哉。顧為人講難、為童子講更難、為童子講到学庸、抑又難之尤難。雖然、以為難而遽不与之講、難以為師矣。知其難而又不能不与之講、抑又難乎為講矣。以舌代耕世年于茲矣。蓋愈講愈難、愈覚其苦、闕去本子、自審且多不明、

何能使人了然乎。

次に、陸隴其『松陽講義』と査体仁『学庸俗話』の違いは、その構成である。陸隴其『松陽講義』巻一の大学では「大学之道章」「康誥曰克明徳章」「湯之盤銘章」「詩云邦畿千里章」「子曰聴訟吾猶人也章」「所謂誠其意者章」「所謂修身章」「所謂斉其家章」「所謂治国章」の九章に分け、各節ごとに朱熹の章句を解説するとともに、各章にどのように読むべきかを記している。例えば「子曰聴訟吾猶人也章」では、陸隴其は次のような言葉を添えている。

這一章釈経文本末之義。即聴訟一端観之、而新民之必本於明徳可知。経文以明徳為本、新民為末、言之既明矣、然人往々不能深信、見説礼・楽・政・刑、便知其必不可少。見

説格・致・誠・正・修、便謂稍有欠缺亦不妨。…

『松陽講義』の中庸部分は巻二・巻三で、例えば巻二は「天命之謂性章」（首章）、「君子中庸章」（第二章）、「中庸其至矣乎章」（第三章）、「舜其大知也与章」（第六章）、「回之為人也章」（第八章）、「天下国家可均也章」（第九章）、「子路問強章」（第一〇章）、「素隠行怪章」（第一一章）、「君子之道費而隠章」（第一二章）、「道不遠人章」（第一三章）、「君子之道辟如行遠章」（第一五章）、「鬼神之為徳章」（第一六章）、というように構成されている。上述した「教正書」で賀瑞麟は陸隴其のようにしたらどうかと提案したので、査体仁は編集構成を修正した際（光緒一七年）に再検討したようだ。今、『学庸俗話』十三巻を見ると、上引した『松陽講義』の大学部分同様、章の始めは「這一章釈経文本末之義」のようになっている。（傍線部）

このように、査体仁は『松陽講義』に倣って『大学俗話』では各巻頭に「釈～」と述べ、『中庸俗話』では自分の言葉で平易な説明を加えているが、分章方法については朱熹の注を尊重し（次頁の表中の波線部）、『松陽講義』のようにはしていない。更に面白いのは、注釈の中に査体仁が自分の感情を述べているところである。『大学俗話』巻二には次のように言う。

夙読朱子云、伝文雑引経伝、若無統紀、然文理接続、血脈貫通、深浅始終、至為精密、熟読玩味、久当見之。体仁最愛此語為読大学要法、合詳釈明・新・至善三章。首三引書、釈明明徳由王而帝、顕示大学淵源。結以皆自明也。一皆字、見不独帝王、是人都当明明徳。一自字、見推不得、替不得。下章釈新民、即緊接自明意。

テキストでありながら、本書は査体仁の主観的な理解が

1冊目			
卷1	大学俗話	卷一経	查大仁曰、聞之大学一書、以三綱領、八條目尽之。
卷2	大学俗話	卷二伝	查大仁曰、曽子当日、恐人不知大学三綱領的八條目是甚様子、常与他門人講説、門人本他心意、立伝解経、為天下後世講釈明白。第一章釈明明徳。
卷3	大学俗話	卷三伝	第五章釈格物致知。此條古本大学無伝。
卷4	大学俗話	卷四伝	第八章釈修身斉家。伝者説経所謂斉其家修其身者。
卷5	大学俗話	卷五伝	第十章釈治国平天下。查体仁曰、此大学最長篇文也。
2冊目			
卷1	中庸俗話	卷一首章	查体仁曰、聞之、子思子慮道学之失伝而作中庸、為萬世明道之書也。
卷2	中庸俗話	卷二第一支	第二章、下九章之綱也。至十一章、朱注為第一支。子思尽引夫子之言、以明首章之義者止此。查体仁曰、言雖尽出孔子、意尽出于子思。
卷3	中庸俗話	卷三第二支	十二章、下八章之綱也。至二十章、朱注為第二支。子思言費隠、申明首章道不可離之意也。其下八章、雑引孔子之言以明之。查体仁曰、大意是言此率性之道、本於天命之性。
3冊目			
卷4	中庸俗話	卷四第二支	哀公問政、子曰、公為周後、欲為政、当法祖而言文武。文武之政、本唯麟之徳意、而行官礼之大法。
卷5	中庸俗話	卷五第三支	二十一章、至三十二章、朱注為第三支。子思承上章夫子天道人道之意而立言、勉人尽人合天也。查体仁曰、上章既言知仁勇、備費隠之道、将道之全体大用、已経説尽。
4冊目			
卷6	中庸俗話	卷六第三支	観誠者之本体功用、既同於天地、而誠之者、求進於至誠之道。致功之詳悉何如。
卷7	中庸俗話	卷七第三支	夫古今尽中庸之道、立中庸之極、不為隠怪、不廃半塗、依乎中庸。
卷8	中庸俗話	卷八末章	吾前言仲尼体天之徳、因以至聖至誠明之、中庸之道、尽矣至矣。

見て取れる。例えば『中庸俗話』首章の説明で「朱子教読書之序、先着力看大学、次着力看論語、又着力看孟子、三書看得了、中庸半切都了。査体仁看来、其実大中二書相表裏、総在人心上做去」といい、本書が『大学』と『中庸』を一セットにしている意味を言い含めている。このように、『学庸俗話』は初学者のために平易で且つ抽象的な内容を理解しやすいようにすることを主とした書であるとともに、査体仁自身が強くその倫理を信じて実践していたことがわかるのである。

五、最後に

初代懐徳堂学主・三宅石庵（一六六五～一七三〇）によって唱えられた中庸錯簡説は中井竹山によって補完せられ、『中庸懐徳堂定本』として完成する。これは「誠」の思想を『中庸』の核心と捉え、『中庸』の後半に「誠」が説かれているから第十五・十六章の部分は錯簡であり、本来後半部にあるべき文章と考える。このテキストクリティークの手法は、重建懐徳堂の講師・武内義雄へと受け継がれ、『易と中庸の研究』（岩波書店、一九四三年）に結実した。武内義雄（一八八六～一九六六）は、京都帝国大学支那哲学科卒業後、大阪府立図書館司書を経て、大正三年に懐徳堂講師を務めた。その後彼は中国へ留学し、大正一一年に孔子没後二千四百年記念事業として佚存書である梁・皇侃『論語義疏』を校訂して懐徳堂本『論語義疏』として刊行した。

懐徳堂の五井蘭洲（一六九七～一七六二）は、漢文を解しないものに『中庸』を理解させるために『中庸首章解』を書いた。中庸は抽象的な内容であるため初学者には理解し難いものであるが、道徳を行うための根拠として理解させなければ本当の道徳は行なわれないと考えていた。五井蘭洲は晩年に『中庸』天命性図も記しているが[注26]、平生は講義に努め中井竹山・履軒を育成し懐徳堂の学風に大きな影響を与えた。

再び重建懐徳堂との関係を見てゆけば、五井蘭洲の精神を継いで懐徳堂の教壇に立った吉田鋭雄もまた、査体仁と似るところが多い。吉田は大阪に生まれ、大阪府立第一中学校（現：大阪府立北野高等学校）を卒業後、代用教員を経て、大阪朝日新聞の編集部に勤務していたが、肋膜炎に罹り退社。明治四五年、大阪から池田に移り静養し、その後大阪府立図書館の書記を経て、大正五年重建された懐徳堂に勤めることになった[注27]。以来三十年以上にわたり、吉田は懐徳堂で漢文教育に携わった、いわば在野の儒者である。機関誌『懐徳』も創刊号

から五号までは、池田の太陽日報社で印刷しており、北摂池田は懐徳堂とゆかりの深い土地である[注28]。吉田は北摂池田の先儒顕彰に功績を残し、特に富永仲基・田中桐江（一六六八）と荒木李谿（一七三六～一八〇七）の詳しい伝記を記している[注29]。また吉田は査体仁と同様に詩を愛し、池田で呉山社と言う漢詩結社を作った。吉田の出世作でもある『田中桐江伝』を印刷したのも池田の太陽日報社であり、この『田中梧江伝』が評価され、吉田は大正一二年に文部省在外研究員として北京大学に留学することができたのである。吉田に太陽日報社を紹介し、共に池田の先儒顕彰に尽力した懐徳堂の同僚・稲束猛は、京都帝国大学出身で狩野直喜の弟子であり、懐徳堂では韓非子を講義していた。吉田鋭雄と共に懐徳堂教授を務めた松山直蔵もまた『北宋五子哲学』を執筆し、宋学を基本の学問とし、懐徳堂では『理学宗伝』を講義し、『近思録』や『周易程伝』などの授業を担当していた[注30]。

重建懐徳堂では大正六年（一九一七）より『四書』と『孝経』を一年で修了する素読科を設け、満一二歳から一八歳の者に限って無料で毎週月・木・土の三回、午後一時から六時までの間学習した。この素読の講師を務めたのが吉田鋭雄である。吉田鋭雄が重建懐徳堂としてどのような学問を求めていたのか、そういう視点で見るとき、吉田鋭雄と査体仁の間に共通性を感じざるを得ない。吉田は素読科だけでなく経学も教えており、北山文庫続には講義のために書き入れした劉師培著『経学伝授考』や宋元学案などを写した『北山雑抄』などもある。また吉田が蜀学を意識していたのかという問題については北山文庫続に所蔵するノートや資料を調べる必要があろう。

『学庸俗話』というほとんど忘却されている文献ではあるが、今回のシンポジウムのテーマのシンボルとして紹介を兼ね、試みに論じてみた。また『学庸俗話』が、いつどこから購入されたものなのか、そして重建懐徳堂において『学庸俗話』はどのように読まれたのかという二つの重要な問題については今後の課題としたい。

懐徳堂と蜀学との関係を文献で見てみれば、例えば仮名で書かれた中井履軒著『述龍篇』（諸葛亮の兵法解説書。一七七三年自序の自筆手稿本）[注31]は懐徳堂にしか存在しない巴蜀文献と言えよう。蜀地域の文献がどのようにして懐徳堂にもたらされ、どのように読まれたのか、そして懐徳堂の学問に蜀学がどのような影響を与えたのか、このような問題も四川大学古籍整理研究所と懐徳堂研究センターの両研究機関が連携して研究に当たり

うる将来的なテーマになるであろう。

注

（1）留学中の日記『遠游日乗』二冊、北山文庫（一〇四五―一八七）所蔵。

（2）釜田啓市「吉田北山の北京留学」、『懐徳』（通号 七六）、二〇〇八年、第二六～三四頁。

（3）北山文庫は昭和三一年（一九五六）に寄贈されたものと、昭和五四～五五年（一九七九～一九八〇）にかけて寄贈された「北山文庫続」（第二次北山文庫）がある。北山文庫続、すなわち第二次北山文庫目録については、井上了「大阪大学附属図書館蔵『北山続』暫定目録」（『懐徳堂センター報』二〇〇四年）を参照されたい。『懐徳堂文庫図書目録』刊行後に受け入れされた書籍や草稿・ノート・講義録などの資料を含む貴重な資料である。

（4）『懐徳堂文庫図書目録』、一九頁。

（5）『四書撫餘説』、『四書経学考』、『四書考異総考』、『四書経注集証』、『四書典故覈』、『四書教子尊経求通録』、『四書纂言』、『四書説苑』、『四書説略』、『四書緯』、『大学心解』、『四書疑言』、『大学章句質疑、中庸章句質疑』、『増註四書人物類典串珠』、『図画白話解』。

（6）湯浅邦弘『懐徳堂事典』大阪大学出版会、二〇七頁、懐徳堂遺書一を参照。

（7）『四川大学図書館館蔵珍稀四川地方志叢刊』第七冊目所収『大邑県郷土志』、第三七五頁および同治『大邑県志』巻一六中を参照。なお同治『大邑県志』では査時銀、『大邑県郷土志』では査時顯とする。

（8）『四川大学図書館館蔵珍稀四川地方志叢刊』第七冊目、第三四六頁

（9）『四川大学図書館館蔵珍稀四川地方志叢刊』第七冊目、第三四六頁

（10）『四川大学図書館館蔵珍稀四川地方志叢刊』第七冊目、第三八五頁。

（11）『四川大学図書館館蔵珍稀四川地方志叢刊』第七冊目、第四〇一頁。

（12）「体仁無学兼多魯鈍、…或能竟其所学、小有造就、不虞遭家不造、母氏又遂棄養、飢駆出走、欲別有営営。所長既百無一能、賦性復拘拘多所不可、為餬口計買硯為田、輒敢自欺以欺人曰、某読書識字人也。某読書識字人也。遂靦顔為人館師矣。」

（13）民国『大邑県志』巻十一、査体仁の條。

（14）同治六年『大邑県志』は、巻十三・巻十四に「汪瀛志稿」が加えられており、巻十九巻末には「汪瀛志補正誤十條」が附してある。

(15)『四川大学図書館館蔵珍稀四川地方志叢刊』第七冊目、第三七九頁。また『汪屏山述略』という書があったとされるが現在は所在不明である。

(16)『四川大学図書館館蔵珍稀四川地方志叢刊』第七冊目、第三八五頁。

(17) 同治六年刻本『大邑県志』巻二十、張申五跋文、第一一六八頁。

(18)『青屏山房全集』(四川省図書館所蔵) 巻三。

(19)『青屏山房全集』(四川省図書館所蔵) 巻一。

(20) 成都市地方志編纂委員会『成都市志・図書出版志』、四川辞書出版社、一九九八年、第四七～四八頁。

(21) 迄辛巳冬、姻家子陳生大江従游采芹。壬午歳習挙子業、春仲為講大学、乗興将聖経演就、尋以病止。客冬此念復萌、乃発篋陳書、熟読深思。至今春、乃敢握管補演説十伝、生徒復力請、並説中庸、輒忘謫陋先之計。経始於元日、脱稿於二月之末、為訓蒙之急一切多草草也。雖然数十日辛苦、数十年心念也。

(22) 夏間乃率意分大学為五巻、入秋又擬分中庸据首末総冒総結中分三大支応為五巻、以篇幅多寡不倫、妄将第二支分巻為二、第三支首六章、次三章又次三章分巻為三、惟首末及第一支各為巻一、共成八巻。

(23) 惟意主引蒙、是以反覆滋多。即刪初稿十之二三。字亦不少、非喜饒舌、敘其苦心也。用述鄙懐、尚俟高明正是、繁簡得宜、解説不謬。

(24)『四川大学図書館館蔵珍稀四川地方志叢刊』第七冊目、第三五七頁

(25) 賀瑞麟著、王長坤・劉峰点校整理『賀瑞麟集』、西北大学出版社、二〇一五年。

(26) 湯城吉信「五井蘭洲『中庸』天命性図について」、『日本漢文学研究』一一号、二〇一六年。

(27) 吉田鋭雄『田中桐江伝』(池田叢書第一、大阪史談会、一九二三年) 所収、西村天囚「田中桐江伝の序」を参照。

(28) 藤井知敏「池田と懐徳堂」、池田文化風土研究会『池田と懐徳堂』、一九九九年。

(29) 田中桐江は、出羽庄内の出身。享保九年 (一七二四) 池田に居を移した後、「呉江社」を興し、朱子学・漢詩を講じた。一方、李谿は、池田出身。伯父富永仲基に従い懐徳堂に入門、中井竹山・履軒に師事し、桐江門下の父蘭皐・弟梅閭とともに池田の学問を支えた。

(30) 竹田健二「重建懐徳堂における朱子学―松山直蔵の学問を中心に―」、『国語教育論叢』二二号、島根大学教育学部国文学会、二〇一二年、第一四五～一五六頁。

(31) 桃島雅弘「中井履軒『述龍篇』翻刻」、『懐徳堂研究』第六号、二〇一五年、第四九～六六頁。